

# 「特別の教科 道徳」でいじめを扱うことについての批判的分析

## —2つの実践事例にもとづいて—

西 伸 之

### 1 いじめと道徳教科化

#### (1) 「深刻化するいじめ」が「道徳教科化」の背景の1つ

来年度（2018年度）から小学校で、再来年度（2019年度）から中学校で、「特別の教科 道徳」がスタートする。道徳を特別の教科にする理由の1つは「深刻化するいじめ」であった<sup>(註1)</sup>。2011年10月に起きた、大津市中学2年生いじめ自殺事件は、「規範意識が希薄になっているからいじめが起きる」といった教育現場への批判の高まりもあって、2年後の「いじめ防止対策推進法」の制定につながり、さらに道徳を特別の教科化する理由の1つとされた。

#### (2) 「道徳教科化」はいじめ防止になるか

「いじめ防止対策推進法」と「道徳教科化」のきっかけとなったいじめ自殺が起きた大津市の中学校は、事件が起きる2年前と前年の2カ年にわたって「文部科学省の道徳教育事業指定校」であり、一般の中学校に比べても道徳教育に力を入れていた学校であった。そこで行われていた道徳教育といじめ自殺の関連は明らかではないが、その中学校のスローガンが「いじめをしない、させない、許さない学校」であったことを考えると、道徳教育の強化がいじめ自殺の防止に直結すると考えるのは、楽観的すぎるだろう。

また、児童・生徒の規範意識の低下や思いやりの心の欠如等道徳的心情の低下が、いじめの増加や深刻化の原因であると感じている教師はさほど多くない。むしろ、集団での自らの立ち位置に敏感で、キャラを演じることに気を遣い、教師や友達とのトラブルはできるだけ回避しようとする児童・生徒が増えていると私は感じる。また、既成の校則やルールには疑問をもたず、(内心は違っても)表面的には従順に従う「よい子」が増えていることも感じる。

人間関係を学びながら自己をつくりあげるただ中にいる子どもたちの、未熟さからくる対立や喧嘩はつきものであり、つらさやしんどさも抱えたそうした経験を通して、自他を見つめよりよい関係を学んでいくことを、多くの優れた実践は語っている。むしろそうした子ども同士のトラブルを否定的にしか見ず、「ゼロ・トレランス」に象徴されるような監視強化や、「いじめの早期発見・早期解決」とばかり、教師ら大人たちがトラブルに積極的に介入し力で抑えるようとすることで、子どもの自己教育力を奪ってしまっていることこそ、問題であろう。

また、子どもを取り巻く学習や情報・コミュニケーションツールの変化や、「こうあらねばならない」の風潮の強まりが、子どもたちから「自己肯定感」を奪い、ストレスを強めていることに、いじめ増加の原因があると感じている教師は多い。

#### (3) 教科化された道徳の授業でのいじめの扱い方の問題

教科化された道徳の授業でのいじめの扱い方には、看過できないいくつかの大きな問題がある。

まず第1に、「弱さ＝醜さ＝ダメなこと、強さ＝美しさ・気高さ＝すばらしいこと」とする特定の価値観

に基づいた指導を強要していることである。

文部科学省（以下においては「文科省」と略称）が「いじめの防止等にもつながる内容項目」と位置づける「22 よりよく生きる喜び」の学習指導要領解説は、パスカルの言葉を引用しながら、弱さに負け、良心の呵責に負けるのは恥ずかしい人間であるとする。さらに、「良心にしたがって生きる＝義務の遂行＝人間として生きる」と乱暴に結びつけ、強くならねばならないと強調する<sup>(註2)</sup>。

「良心の葛藤」をことさら強調し、「弱さに負けるな。それは人間として恥ずかしいことだ。強く気高い生き方を目指せ。それが、義務を果たすことなのだ」の価値観で道徳の授業が行われたとき、子どもたちはどうなるだろう。「弱くてもいいんだよ」と「弱さ」を肯定的に受けとめられる雰囲気とはほど遠い空気のなかで、子どもたちは「弱さ」を出せなくなり、「いじめを止める勇氣（強さ）をもてない自分は、情けなくダメな存在」と自己否定感を強めることは想像に難くない。弱音を吐けず建前だけが飛び交う授業になり、「道徳の授業」＝「きれいな事を並べ立てるだけの非現実的で役立たない授業」と認識する生徒がますます増えるだろう。文科省は、「いじめを許さない強い心をもち行動できる気高く生きる人間になろう」と結論が最初から見えるこのような道徳授業で、いじめを克服できると本気で考えているのだろうか。

さらに言えば、価値観がどのようなものであれ、「特定の価値観を押しつけるような授業」は、「やってはいけないこと」と今回の道徳教科化に際して文科省が強調していることであり、自己矛盾に陥っていると言わざるを得ない<sup>(註3)</sup>。

第2に、「弱さ」への肯定的共感や、そこに止まらず成長していく上で果たす「同年代の仲間たちの役割」を重視しないどころか触れてもいないことである。

文科省は、「誰もがもつ弱さ」と表現し、それへの共感の必要性は言うものの、根底に「弱さ＝ダメなこと」の価値観が横たわっているため、無条件の受け入れとはほど遠い。それは、例えば、最愛のものを失い悲しみの底にいる人に対して、「辛いよね。わかるよ。でも、負けないで頑張って」と励ます行為と同じようなものかもしれない。善意であるとはいえ、そうした励ましは、時にもっと大きな傷になってしまうことはよく知られている。一方、同じような経験をもつ人が、「辛いね。私もそうだよ（そうだったよ）」と寄りそい、その人の悲しみを無条件に受けとめてくれたことで、初めて自分と向き合えるようになり、悲しみを乗り越えていこうとする気持ちが芽生えていくこともよく知られている。生徒たちも同じではないだろうか。

そうであるならば、同じように自分の弱さに悩んだり落ち込んだりしている同年代の仲間たちの存在と関わりは大変重要であろう。信頼できる仲間たちの無条件の共感によって、安心感が生まれ、向上心が芽生えていくのである。

しかし、文科省が道徳でやろうとするいじめを扱う授業には、生徒同士を積極的にかかわらせる視点が欠けている。同年代の仲間たちによる無条件の共感からはほど遠く、安心して自分の課題に向き合う土台がないまま「弱さとの葛藤」を求めるものとなっている。

第3に、道徳的価値観の葛藤だけで、「分かっているができない弱さ」を乗り越えさせようとするのは、精神至上主義の理想論を振りかざす「上から目線」の現実離れた方策になっており、「弱さ」を乗り越えるための現実的で具体的な条件である「一人じゃない」と思える“仲間の力”を教え、仲間を組織する方法を教える発想がない。

理不尽なことに会ったとき、それと戦うよりも、我慢したり見て見ぬふりをしたりする人が多いのが現実である。「バワハラで辛いけど、生活があるので我慢している」「店員に暴言を吐く客を止めたかったが、自分がやられたらいやなので見て見ぬふりをしてその場を去った」…それは日常的によく見聞きする光景である。文科省が求める、「弱い自分との葛藤に勝ち、よりよく生きる喜びを手に入れる」形で乗り越える（すなわち、理不尽なことに黙っていないでそれと戦う）人はそれほど多くない。むしろ、正義感に突き動かされ、良心にしたがって一人で行動したために、逆に自分に災いが降りかかることが多いから、見て見ぬふりをしたり、「触らぬ神に祟りなし」と身を引く人が多いのだろう。それを「弱いヤツ」と責めることは誰もできない。人間の意志の力を軽視するつもりはないが、一人は弱いものである。正しいと分かっているのに、一人ではできない、それが人間ではないだろうか。

「理不尽なことに負けない」一つの有効な手立ては、一人で戦わないことである。行動を起こそうとしたとき、一緒に行動してくれ応援してくれる仲間の存在は、安心感と勇気をくれ、「立てない私」を乗り越え

る力となる。一緒に立ち上がってくれる仲間がいて、その数が多ければ多いほど、「立てない私」が「立てる私」に変身しやすくなり、自分への誇りと仲間への信頼を強くする。

いじめに対して、見て見ぬふりをせず行動を起こせる子どもたちを育てたいなら、集団の力を教え、その組織の仕方を教え、実際に行動し体験させる教育が重要だろう。しかし、それは、文科省の方針のどこにも見あたらない。それでは、立ち上がりたい気持ちはあってもできない多くの人の、あきらめの気持ちと無力感を強めるだけだろう。(それが文科省のねらいかもしれないが)

第4に、いじめで深刻な「自己肯定感」や「人間信頼感」が傷つくことへの認識が弱く、それを育てる観点が欠けている。

いじめで子どもが自死する事件が後を絶たないことが、いじめの最も深刻な問題であり、いじめによる自死を防ぐこと、自死に至るようないじめをなくすことが緊急の課題であることは言うまでもない。

しかし、物理的な死でなくとも、いじめが深い心の傷となり、その後の人生に大きなマイナス影響を及ぼすことは、多くの事例が物語っている。それは、「いじめられた体験」だけではなく、「いじめた体験」や「傍観者でいた体験」も含めてである。

いじめの被害者は、「いじめられたのは、自分に劣ったところやダメなところがあるからだ」「自分はいじめられる情けない存在なんだ」と自己否定の気持ちを強める。また、「誰も助けてくれなかった」体験は、人を信じられない深い傷となる。一方、いじめの傍観者は、「見て見ぬふりをしたずるい自分」「困っている人を助けられなかった弱い自分」と自己を責める。いじめの加害者も、「弱い者をいじめた」記憶が、消すことのできない汚点となる。

また、きちんと解決されなかった「いじめられた体験」のせいで、不登校やひきこもり（社会に出てからの人間関係のつまづきを引き金に社会参画ができなくなったケースも含めて）になり、今も苦しんでいる若者が少なくないことを、私は長年関わっている「不登校の親と教師の会」で感じている。

そうならば、いじめが起きたとき、重視すべき取り組みは、いじめた子、いじめられた子はもちろん、周りの第三者など、かかわったすべての子どもたちに、「自己肯定感」と「人間信頼感」を育てることだろう。

しかし、文科省のどの文書を見ても、道徳でいじめを扱うことで、いじめによって傷つく「自己肯定感」や「人間信頼感」を取り戻し育てる視点は見られない。

第5に、「特別の教科 道徳」で展開される、子ども一人一人の「心の持ちよう」を重視したいじめの扱いは、いじめの原因にもなり、解決の重要な糸口にもなりうる「子ども同士や子どもと教師の人間関係」への取り組みを軽視したり後回しにする風潮を強めかねない。

いじめが、子ども同士の人間関係のゆがみの表れであることを考えれば、よりよい人間関係をつくることは、いじめを防ぎ、いじめが起きたときの有効な力となる大事な教育活動である。子ども同士や子どもと教師の、信頼関係を土台にした温かい人間関係は、いじめに取り組む大きな力であり、それは日常の地道な教育活動の積み重ねによって構築される。しかし、道徳の授業で心の葛藤をさせ、「弱さに負けない強い心を持つことによって」いじめの解決を目指すことは、いじめの捉え方を矮小化し、いじめの原因やその克服を多角的に考察する作業を遠ざけることにつながる。

また、文科省がいう「道徳の授業で、自分の弱さを見つめ葛藤を体験させる」ためには、日頃から一人一人の性格や経験、友だち関係、家庭環境などをていねいに見ていなければ難しい。日々の学校生活の中で絶好の葛藤場面があったのに、それを見逃して何もしなければ、子どもは自分の弱さに気付くこともなく、当然「どうしたらいいか」も考えることないままやり過ごしてしまう。道徳の授業でいじめを扱い、「分かっているけどできない」心の葛藤を求めても、自分のこととしてとらえることができず、「正論を述べて終わり」の授業になりかねない<sup>(註4)</sup>。

## 2 いじめに取り組んだ2つの事例

学級担任や生徒指導主任として、これまで、中学生のいじめやいじめに近いトラブルにかかわってきたが、前述の「文科省の考え方」を実践的に批判し、いじめをどう取り扱うかの問題提起となる2つの事例を紹介する。嫌がらせの手紙を送られ続けたA子を守ろうと立ち上がったクラスメートの行動「僕らが守る！」(事例1)と、いじめられた経験から「人もクラスも信じない」と、中3・2月の班ノートに書いたB男とクラ

スマートの文を使った授業「班ノートでのやりとり」(事例2)である。どちらも、2年・3年とクラス替えなく担任したクラスで、中3の卒業間近に起きた出来事である。

2つの事例を通して、道徳の授業で、個人の内面の葛藤など精神的営みをことさら重視し、「“自らの弱さ”を乗り越えられないのは恥ずかしい生き方なのだ」といった価値観を押しつける文科省のやり方の誤りと、互いの弱さに共感し、仲間とともに自己肯定感を育てていく取り組みと、そこに貫かれる教師と生徒、生徒同士のていねいなかわりの積み重ねによる信頼関係の構築を目指す集団づくりが、いじめに取り組む上で大変重要であることを明らかにしたい。

## 〈1〉事例1「僕らが守る！」

### (1) 学級・学年の紹介と取り組み

学年2クラス52人の小規模校で、私は1年から3年までの3年間(1993年4月～1996年3月)、学年主任兼担任としてじっくり関わった。3年間を通して子どもたちに語り続けたことは、「居心地のいい学級・学年をつくろう」だった。教師にとって学校が楽しいものにならなくてはと思い、失敗も含め実践をオープンにし意見を求めながら楽しい学年になるよう心がけた。

子どもたちには、「\*学ぶことの意味を考える \*多様な考えを受け入れる関係をつくる \*自己肯定感を育てる」を念頭に、教科の授業や学校行事を中心に様々な取り組みを行った。学活や道徳では、新聞や書物・ビデオ等を利用して、いろいろな話題を取り上げ、その都度自分の考えや感想を書かせて全員で共有する授業を繰り返し行った。

彼らが3年生の時は、愛知の大河内君、新潟上越の伊藤君の「いじめ自殺事件」が起きた年でもあり、いじめについての座談会をやってそれを文化祭の学級壁新聞に載せるなど、いじめ問題を積極的に取り上げ、生徒とともに考える時間を多くとった。学年職員は、機会あるごとに次のようなメッセージを生徒たちに伝えた。

「いじめ」が大きな社会問題になったのも、今年の、特に2学期後半の特徴でした。上越市で起こった悲しい事件で、私たちは「一人一人の命は、何よりも重く、かけがえのないものであること」「自分は自分であっていいし、人間の値打ちは誰とも比較できないものであること」「違うことが当たり前。理解し合う努力もしながら、たとえ理解できなくとも、違いを受け入れ合うことが大事なのだということ」「どんな人も弱さを持っている。それを支え合い、足りないところを補い合い、それぞれの存在を大事に合うこと」などを、一生懸命語りました。A中の3年生は52人。一人欠けても、A中の3年生ではなくなります。目には見えなくても、誰もが互いに影響を与え合い、いろんなことを教えてくれているのです。

今年の大きな出来事に、1月の阪神大震災がありました。あそこではみんなと同じくらいの子どもが、いいえ、それよりもっと小さな子どももたくさん亡くなりました。私たちはたくさんの命が失われたあの出来事で、勉強ができる・できないとか、スポーツができる・できないとか、いい子であるとかそうでないなんてことよりも、とにかく生きていること、それが何よりすばらしいことなんだということを、大きな悲しみとともに感じました。一人一人が、生き生きと笑顔で毎日を過ごせることがどんなにすばらしいことか、さらに、生きていることそれ自体がすばらしいことなんだということを教えられたのです。

学校は、全ての子が、自分の意思で自らの人生を生き幸せになるための力をつける場所です。ですから、そんな学校で、いじめによって悲しく辛い思いをする人がいるとしたら、なんとしてもそんな状態を改めなければなりません。みんなに語り続けた「居心地のいい学級・学年・学校をつくる」というスローガンには、私たちのそんな思いを込めたものでした。

「自分を大切に思うから、他の人の人生も大切に思える心が育つ」、私たちはそう思います。ですから、「いやな自分、ダメな自分もあるけど、自分が大好きだよ」と言える、そんなみんなになってほしいと思うのです。

(2学期末発行のA中3学年だより「2学期と1995年を終えるにあたって」から抜粋)



## (2) A子と班長会

A子は、勉強や運動が苦手で、自分に自信をもてず、いつもおどおどしている生徒だった。話すのは苦手だが、班ノートや授業の感想はいつもたくさん書いていた。私は、正直な気持ちを書けることをほめ励まし続けた。

定期・不定期で開く班長会では、クラスや学年の問題を取り上げ、今困っている人はいないか、気になる人はいないかを話し合い、どんな援助ができるか考えることが普通に行われるようになっていた。コミュニケーションが苦手なA子も時々話題に上がっていた。

## (3) 脅迫の手紙

卒業間近の2月、「明日の昼休み、1:00に屋上に来い」という新聞の文字を切り貼りした手紙が、教室のA子の机の中に入れてられていた。それを皮切りに、同様の手紙（「500円もってこい」と金銭を要求するものや、「高校落ちろ!」と不幸を願うものなど）が、廊下にかけてられた本人のコートのポケットや下足箱などに入れられることが続いた。荒れていた2学年男子の仕業だと思われた。

「これが私の中学時代最後の思い出になるのだろうか」と書いたA子の班ノートを読み、私は、逆にこの嫌な出来事を、彼女にとってもクラスにとっても、最高のすばらしい思い出にして卒業させたいと考えた。

私には、事実を知ればクラス全員がA子を守ろうと立ち上がってくれる確信があったので、A子の了解を得た上で、事実を班長会に伝え、「A子に励ましのメッセージをみんなに書いてもらいたい」と提案し全員の一致で了承された。その後、これまでの経過をみんなに伝え、全員のメッセージをA子に渡した。放課後、班長たちと有志が残ってこれからどうするか相談し、犯人がこっそりと手紙を置く現場を捕まえようと作戦を練り、A子が一人にならないよう一緒にいる方法を考え行動した。

## (4) クラスメートのメッセージとA子の感想

「クラス全員でA子を守るから、安心して」「今は本当につらいと思う。一人で背負わずに、俺たち友達・仲間、絶対守ってやる。頼ってほしい」「苦しんでいる仲間がいるのに、何も知らないような顔をして卒業なんかできない。私たちが信じて乗り越えようよ」「一緒に悩もう!」……A子の不安に心を寄せ、A子を守る決意がメッセージには並んでいた。それを読んだA子は、感想を班ノートに書いてきた。

私は、このクラスで絶対よかった。すごくいいことばかり書いてあって、本当にうれしかったし、放課後、何人もの人から励ましの言葉をもらいました。このクラスでなかったら、私、どうしようと思いました。中学最後の思い出は、もしかしたらみんなが書いてくれた手紙になると思います。言葉に言い表せないくらいうれしかったし、安心しました。私を守ってくれて、本当にありがとう。早く元気にならないとね。

(A子は、メッセージを受けとった翌日の放課後、一人一人に宛てた感謝の手紙を、みんなの机の中に入れていた)。

結局、嫌がらせの犯人は特定できないまま、A子たちは卒業したが、卒業式数日前に入れられた最後の脅迫手紙の文面は、「3-1さいてー ちょうむかつく とくにおまえだぞ はよそつぎょうしてくれ」だった。A子を孤立させ苦しませようとした意図に反し、A子とクラスの絆が強まり、「いじめは許さない」状況ができあがったことへのいらだちが伝わってくる文面だった。

## (5) いじめを取りあげた新聞記事を使った道徳授業

前年（1995年）11月に起きた上越市の中学生いじめ自殺事件を取り上げた新聞の連載（「凍った叫び」新潟日報）が始まった。A子の事件とも重なり、各地で起きていた様々ないじめの事例を取り上げた新聞の連載を読んだ感想を書き、それを発表し合う道徳授業を行った。生徒たちの次の感想は、これまで積み上げてきた私たちの教育実践の到達点を示している。

「私のクラスは記事と比べて違うところがたくさんある。第1に、支える人がいること、第2に、みんなで本人を励ましていること、第3に、本人が強くなってきたことである。どうしてそうなったのか。それはみんなが信じ合っているからだと思う」「自分も、いじめを止める勇気がない。止めたら自分がやられると

思う気持ちが強いので、いじめが起きても止められないと思う。でも、一人じゃなく、2～3人、いや、もっと多くの人がいじめられている人の味方になれば、止められると思う」「人を信じることで、いじめをなくせるんじゃないかと思う。そのためには、相手を尊重し、相手と自分を知ることが大切なんじゃないかと思う。一人じゃ助けられないかもしれないけど、みんなでやれば怖くない!」「いじめは止められないと思っていたが、A子さんへの嫌がらせがあって、少し考えが変わった。A子さんを守って助けてあげたかった。次に嫌がらせの手紙が私のところへ来ても、少しも怖くなかった」「中学生になってから、初めて教わったことがある。人は違って当たり前、その違いを認め合うことが大切だということ。そして、いじめが起きたとき、一番の頼りは、話せる友だち。友だちがたった一人でもいて、自分のことを分かってくれて、心配してくれることが分かったと、とても救われるのだと思う」……。

#### (6) 「僕らが守る!」の実践が教えること

- ① いじめについて、新聞を使った多角的な学習と体験を通して、多くのことを学んでいる  
上記の感想からは、生徒たちが、

- \* いじめられたとき、最も大きな力になるのは、友だちの支えであること
- \* 一人でいじめに立ち向かう勇気は出せなくても、一緒に行動してくれる仲間がいれば、立ち向かう勇気を出せること
- \* 仲間をつくるには、信頼関係が大事であり、そのためには互いをよく知り合い、違いを尊重し合うこと
- \* 「仲間がいる」安心感は、人を強くすること

などを学び確信に至ったことがわかる。これらは、いじめに直面したときはもちろん、これからの人生で出会う様々な理不尽さに向き合うとき、有効な力になるのではないだろうか。

#### ② 「自己肯定感」と「人間信頼感」を育てている

この実践では、いじめた子の特定と指導はできなかったが、傷つき落ち込むA子を助けようとみんなが立ち上がる行動を組織できた。A子は、「いじめられたつらさを分かってもらえた、助けてもらえた、私は一人じゃない」と確信でき、周りの生徒たちは、「一人じゃないし無力じゃない。みんなが支えたし、私も支えた」と誇りと自信をもち、「自己肯定感」と「人間信頼感」を育てていった。「嫌がらせの手紙」をもらった当初、「これが私の中学最後の思い出になるんでしょうか」と泣いていたA子は、「中学最後の思い出は、もしかしたらみんなが書いてくれた手紙になると思います」と班ノートに書いていた。

#### ③ 時間をかけた「互いを尊重する」集団づくりと、トラブルを成長のチャンスにする営み

「僕らが守る!」の集団は、自然にできたものではない。各自の考えや気持ちを班ノートや学年だより、授業等様々な場面と手段でオープンにし、互いに関心をもち関わり合う意図的な取り組みを積極的に行うなど、一人一人を尊重し、自己肯定感を育むことと、教師と生徒、生徒同士の信頼関係をつくることに、意識的に、地道に取り組んできた結果である。

また、トラブルや問題を避けるのではなく、集団や個々の成長の絶好の機会にしようと生徒たちに関わった。経験が浅く発展途上人である子どもたちが、人間関係やその他のことで様々なトラブルを起こすのは当たり前であり、そうしたトラブルを通して大切なことを学んでいく。トラブルが起ると、大きな労力を費やし弊害が起きることもあるため、できるだけ問題が起きないように監視を強める傾向が強まっているが(ゼロトレランスは、その最たるものだろう)、それは、自他を見つめさせたり、心の葛藤をさせたりしながら、心を大きく成長させる絶好の機会をみすみす捨てるようなものである。時間も労力もかかる教育活動だが、そこから学んだことは本物の力になる。(トラブルを肯定的に受けとめ、子どもたちとともに取り組むためにも、教師にゆとりがなければならぬし、教員の勤務条件の改善が必要であることは言うまでもない)。

## 〈2〉事例2「班ノートでのやりとり」

### (1) 学級の紹介とその雰囲気（Y男に対する気持ちや担任との関係）

1クラス36人・学年8クラスの大規模校で、1999年4月～2001年3月の2年間、2年・3年と持ち上がりで担任をした。家出・外泊・夜遊びなどでほとんど登校せず、登校しても保健室通いの女子と、校内で問題を繰り返す男子（Y男）がいるクラスで、彼らへの対応にかなりの時間と力を使った2年間だった。特に、他クラス生徒と喫煙や授業エスケープ、教師への暴言、器物破損などを繰り返すY男への指導は、空回りすることが多く、荒れを収めることはなかなかできなかった。それでも、それまで同様、互に関わり合う活動を基本にした行事や班ノートを使った、担任と生徒、生徒同士のやりとりを通じて、また、Y男を排除せずクラスの大事な仲間として受け入れる私の姿勢を見て、クラス内の人間関係はいい感じになっていった。

### (2) Y男をめぐる

3年の秋、国語の時間、Y男がキレて、教科担任の女性教師に暴言を浴びせ、壁やドアを殴り教室で暴れているとの通報で、教室へ駆けつけた。落ち着かせようと、Y男の手をつかみ別室へ連れて行こうとする私を、Y男はすごい力でふりほどき、「死ね!」とわめきながら校舎を飛び出していった。（その日の放課後、学校に戻ってきた彼は、何事もなかったかのように学校のプレハブの屋根の上で、たばこを吸いながら下校する下級生と同級生をからかったり、冗談を飛ばしていたりしていた）。

同じようなことが繰り返し起こっていた時期で、私はY男の指導に行き詰まっていた。その一方で、今Y男を止めることができるのは、教師ではなく友だち（クラスメート）だと感じていたし、Y男のことを人ごとだと思わず、できる範囲で関わってほしいと考えていた。また、子どもも大人も、「困ったときは助けてほしい」と頼っていいことを身をもって示したいと思い、生徒たちの前で、差し障りのない範囲でY男の事情（家庭で引きこもっている兄に暴力をふるわれ、家が居心地が悪いことなど）を話し、「どうしたらY男は変わるんだろう。私は何ができるだろう。みんなの意見を書いてほしい」と紙を配り書いてもらった。

Y男に対するクラスメートの気持ちは、「怖いがおもしろい奴」（男子）「おもしろいが怖い人」（女子）という感じだが、うれしかったのは、「クラスからいなくなってほしい」とY男を排除する意見は一つもなく、むしろ「みんなが受け入れて積極的に話しかけた方がいい」と、Y男に温かく接しようという意見が大部分だったことである。また、「Y男のやっていることは良くないが、イライラする気持ちや物に当たる気持ちは分かる」とY男の気持ちに共感する生徒や、「先生方の中にはY男を嫌っている先生がいる。怒るより話を聞いてあげる方がいい」と、教師の対応に疑問を出す生徒もいた。

もし、「違法精神」や「社会正義」などの道徳の内容項目の精神を徹底するようなクラスや学校だったら、Y男はもっとひどい荒れ方をするか、学校には来なくなっていただろう。

### (3) 「信用できない」と書いてきたB男のこと

B男は、2年の時は、元気な生徒が多いクラスの中で目立たない存在だった。少数の男子としか話さないとか、クラスメートが呼びかけても返事をしないとかがあったとか、他の生徒からの情報はあったが、取りたてて問題を起こすこともなく3年生になった。しかし、2年終わり頃の道徳の授業で、「誰もが助け助けられる存在だから、困ったときは助けてと言っているんだよ」と、“人を信じることの大切さ”を、さまざまな事例をあげて指導した道徳の授業で、彼は次のような感想を書いてきた。

先生が、「信用することが大切」「信頼しなければならない」と言っていたのはごもっともだと思う。だけど、人を信じて何になるんですか。僕が、小学校3年生で転校してきたとき、一番仲のいい友達ができまして。ところが、6年生になったとき、そいつは僕をいじめたんですよ。今まで信じてきたのは何だったのかって思いました。だから、信用、信頼なんて、ただのきれいごとにしすぎないんだ。人はいづれ裏切るんですよ。人の心の中なんてわからないんですよ。今の仲のいい友人も、いつこうなるかわかりません。信用、信頼という言葉は、好きではありません。

彼のその言葉は、私の心に強く残り、あと1年の彼との付き合いの中で、「人を信じられない気持ち」を少しでも「信じてもいいかな」と思えるような経験をさせられたらと思っていた。

一方、前述のY男の件の時、B男は次のような文章を書いていた。

Y男は、いつも明るくしていても、過去・現在も、つらい・嫌な記憶が続いていること、自分の居場所がないということ、人を信じれないということがわかった。それはオレもそうだ。人の信頼というのはいつかなくなる。そう思う。でも、自分の居場所がないなら、つくればいい。みんなで、友だったら友のためにすることならできるはずと思う。Y男の居場所をみんなでつくって、そこに逃げればいい。今までの暗い記憶より、今から明るい記憶をつくれればいい。大切なのは、過去より現在なんだから。こぼした水はまたくめばいい。このクラスみんな、Y男を「悪いヤツ」なんて思っていないと思う。人を信じる、それをつくろう、ってオレがいえた口じゃないけど……。人を信じるって大切だと思う。信じて初めて、温かい気持ちというのを知るから、Y男ならすぐできると思う。これからの努力で、未来は変わるんだから。

様々な場面を感じていたが、「人を信じることは大切なこと」と思いながら、「人を信じない自分でもいい」と聞き直す自分と、「信じる人間になれたらいい」と思う自分の間で揺れるB男の正直な気持ちが伝わってきた。

#### (4) B男が登校拒否に

3年初秋の体育祭の練習中、男子の中でただ一人やる気を見せず浮いていたB男は、合唱コンクールの練習などでも非協力的な態度をとっていた。そんなB男への不満や反発が、クラスの一部の男子に広がっていた。合唱コンクールが終わったある日、M男のからかいにキレたB男は、翌日から学校を休むようになった。

家庭訪問で、私は、B男の言い分や気持ちを聴くことに徹した。「(悪口を言う) あいつらは変わりっこないですよ」「もうあのクラスに行くつもりはありません」「卒業まで塾と家庭学習で勉強します」と投げやりに話す彼の様子に、これは当然登校しないなと私は思い、「わかった。登校してほしいけど、来るか来ないかは君が決めること。自分の心と体と相談して、一番いいと思うように過ごしな」と、彼の登校拒否を受け入れることにした。

12月に入ると、彼の話も次のように変わってきた。「あいつらは許さないけど、人と話すのが苦手なオレも悪いんですよ」「3学期からは行きます。でも、誰とも話す気ないし、卒業まで笑うことはないと思います」。

#### (5) B男・C子・D男の班ノート

宣言通り、3学期の始業式から登校したB男は、1月下旬の班ノートに2ページにわたって自分の気持ちを書いてきた。長い文章で一部省略するが、次のような文だった。(〔 〕内は筆者の補足)

このクラスには嫌な奴がいる。そいつは、人の嫌なこと、悪口を平気で言ったりしたりする。そのくせ自分が少し言われたらすぐ怒る。とても嫌です。ムカツキます。

一人していると、人の汚点や嫌なところが見えてくる。このクラスでは半分くらい見つけました。自分は明るくすると、なんだか疲れる気がする。前のこと〔＝孤立し不登校になったこと〕で明るくするのは変だと自分でも思っているから。今は一人にいる方が落ち着く。

キレる前の自分に、いろんなことを言ってきた人々に言うことがある。あなた方は何も悪くない。悪いのは自分。自分が勝手に嫌われ、悪口を言われ、キレただけ。それでいいんじゃないかと思う。自分に嫌われる点がなければ、こんなことにならなかったから、これでいい。これが自分が出した結論です。

今、このクラスの自分の友人は0です。○○君や○○君たちは、何で自分にかまってくれるのかと思う。だって、こんなに暗くなったのと話したいなんて思わないでしょう。けど、感謝します。ありがとう。

それを読んだ同じ班のC子が、翌日班ノートに次のように書いて提出した。(抜粋)



B男の文を読んで思ったことを書きます。私も、小学生の頃、仲間はずれになったことがあります。ホントつらかった。けど、そのことがあったあと、私も仲間に混じって、逆に人を仲間はずれにしてしまった。その時は、仲間はずれにされる人が順番みたいに回ってきて、という感じでした。仲間はずれしていじめている方は、別に理由なんかないんです。ただ何となくムカツクってだけでいじめて。いじめてる方って、「コレじゃいけない。別にこんなことしようとしているわけじゃない」って心のどこかでは思ってた、けど、周りの友達に外されたくないから、「そうだよねえ」「ムカツクよねえ」って言い合うことで、友達関係を成り立たせてるって感じでした。今考えれば、そんな関係、ホントの友達って言わないけど……。私が仲間はずれにされてる時は、とにかく悩んで泣いて、悩んで泣いての繰り返しで、ちょっと強がって見せたりもしました。その時は、お母さんにいつも相談してたけど……。

けど、私は、仲間はずれにされても、人を信じてました。人を信じれなくなるときには、かなりつらいと思うから。で、人を信じた結果、中学では、ホントにいい友達ばかりできたし、今になると、そのおかげで自分がすごく成長できたと思うし、こういう経験してたから、人の気持ちが少しでも分かることができるようになったから、いい経験したんだって思います。B男の場合とちょっと違うかもしれないけど、私も似たようなことはありましたということです。

B男は、少し人を信じれなくなってるのかなって思いました。「今、一人でいる方が落ち着く」ってのも、今の正直な気持ちだと思うし、それはそれでいいって思う。けど、〇〇君とか、△△君とかはきつと「このままじゃダメだ」って思ったから、「自分もB男も変わんなきゃ」って思ったから話しかけてるのかもしれないし、話しかけてくれる人には、もっと素直にしゃべってみたいと思います。B男も、話しかけてきてくれる人々には、少しくらい心を開いてもいいと思います。話せば、向こうもきつとうれしそう思うし……。怖がらないでがんばって！って思います。

また、同じ日、別の班のD男（学級委員）が、保健室登校の女子やY男、B男を気遣う文章を班ノートに書いてきた。

### （6） 3人の班ノートとB男の2年の時の文を使った道徳授業

3人の文章は、正論やきれいごとではなく、心から思ったことや今の正直な気持ちを書いていることが伝わってくるものだった。いじめられた辛さやいじめた後悔、人を信じられない気持ちと信じたい気持ち、自分を否定したくなる心と自分を大事にしたい心、仲間のことを思いやる優しさや励まし……。どれも誰もがもつ気持ちであり、クラスメートたちが共感しわかり合えるものであると確信できた。弱さも強さも、不安も喜びも、どれも君の大切な気持ちだし、君をつくっている大切な感情であることを伝えたいと思った。3人の気持ちを共有することで、自分を振り返り、互いを思いやる気持ちを育ててほしいと、3人の許可を得て、3人の班ノートと、2年の時のB男の文を使って道徳の授業をした。

#### 「授業後の感想」（代表的なもの）

E子

今日、3人の文を読んで、すごく感動した。途中で泣きそうになるくらいだった。人間なんて、結構自己中だし、それぞれ違うから、人の中に生きているのがとても不安になるときが、みんな絶対にあると思う。自分は、信じられるものがあるのか、ないのか。信じ頼ってくれる人がいるのか。自分は一人じゃないのか。毎日の生活の中、どんなときでも感じてしまう。でも、人を思いやる行為をとることができなかったとしても、その人のことを思っただけでもすばらしいと思う。だから、B男君は、自分に自信を持っていと思うな。なんか、今日はすごいことを学べた。よかった。

F男

今日の話聞いて、B男が今何を思っているのわかりました。人を信じる、信じないは、自分の勝

手だと思う。けど、人を信じることで、楽しさ、笑いなどを学べて、文句なしの日々を過ごせると思う。逆に、人を信じなかったら何が残る？ もし、自分が他人に信頼されていると感じると、まずうれしいという言葉が浮かぶかな。人を信じることは、信じる人をうれしくさせ、人を信じられなければ、自分にダメージが大きいと思った。今日の話で、3-4はまた強い絆みたいなので結ばれたかな、いや、結ばれたことを信じたいです。今日はいい勉強になった。

#### G男

B男が悪口を言われているとき、自分も悪口を言っていた。過去に僕もそういう嫌なことがあった。だから、仲間はずれとか悪口を言われたりすると、むかついたり、キレたりというのは、少しわかる。なのに自分は、嫌なことをされたり、言われたりしている人の気持ちを知っているのに、周りの人に合わせてしまう。別にむかつかない人でも、「〇〇ムカツクよね」とか言われると、周りに合わせてしまって「ムカツク」と言ってしまう。すぐ人の意見に流されるし、自己中だし、こんな自分がほんとう恥ずかしくて嫌だ。自分で自分にすごくむかついた。だから、これからは自分の考えをしっかりと持って生きていきたい。「悪いのは自分」って書いてたけど、それは絶対違う。やってる方（いじめる方）が悪いんだし……。今日の授業では、いろんなことを思っ、いろんなことを感じて、いろんなことを学んで、これで少し成長したと思います。

#### 「B男の感想」

自分の文を読んで、思考が変わる人もいるかもしれない。だけど、今の自分は、今のままがベストだと思う。人と人との人間関係、自分にとっての苦手なものです。高校に行く前に、本当に心から笑えればいいと思う。

自分は、人に何か恩を受けても、それを返す術がない。相手が話してきても、どう対処すりゃいいのかわからない、そんなところです。この授業でいろんな思いをした人もいると思う。自分には大切な授業だった、そんな気がします。

それ以外のどの感想にも、「いろいろなことを感じ考えた」「大切なことを学べた」「自分とクラスが成長した時間だった」という内容が書かれていた。きれいごとではなく、本当の気持ちを書いた仲間の文のインパクトと、それを自分のことと受け止める彼らの豊かな感性に、私自身教えられた。珍しくY男が静かに話を聞き、3人の文を熱心に読んでいた姿も、3人の文がすばらしい教材だったことを物語っている。

B男の感想には、人と関わることに臆病な、けれど関わってくれたことがうれしい、不器用なB男の性格と気持ちがよく表れていると思う。

彼らの感想に感動した私は、クラスの一人一人に感謝とメッセージを書いて翌日渡した。

#### (7) 「もう一つの通知表」でB男に書いた言葉

年度末、私は普通の通知表とは別に、自分以外のみんなからの一言メッセージと私のメッセージ、クラス写真等を載せた「もう一つの通知表」を、卒業の日に渡していた。B男には、次のようなメッセージを書いて渡した。

人の心を見つめ、いいところも悪いところも見抜く感性の鋭さは、すばらしいと思う。それは、他人に対してだけでなく、自分に対しても同じで、自分のことを深く分析できていたね。それが、B男君の個性だし、すばらしいところです。

B男君とは、いろいろなことを話しましたね。特に印象に残っているのは、2年の時、「人を信じることの大切さ」をクラスに語り、みんなに書いてもらった感想文を読んだ時でした。「人を信じてなんになるんですか。信用・信頼なんて、ただのきれいごとにしすぎないんだ。人はいずれ裏切るんですよ。信用・信頼という言葉は、好きではありません」と君は書いていたね。私の価値観とは違う価値観で生きてきたB男君を強く意識しました。私は、そんなB男君の感じ方を大事にしようと思いました。その気持ちは、

3年2学期後半の事件の時、そしてその後しばらく君が休んでいた時も同じでした。人の気持ちに敏感で、優しい気持ちを持つB男君だから、意地悪な言葉や行為に人一倍傷つき、相手を許せず、そして、そんな「人を許せない自分」を責めてしまうんでしょう。

でも、君のその豊かな感性を、私はすばらしいと思います。これからも、その感性ゆえに傷つくことも多いかもしれない。でも、自分の感じ方に誇りを持ってください。そしていつか、人の温かさに触れ、心から人を信じられるようになったらいいな。いっぱい学ばせてくれてありがとう。感謝しています。

子どもとはいえ、自分とは違う個性をもち、育った時代も環境も違う他者であるから、理解しようと努力することは大事だが、理解できないこともある。しかし、理解できなくても、相手の考えや価値観を丸ごと受け入れ尊重することはできるし、それこそが教師がまず第一にやるべきことだと思う。自分が丸ごと受け入れられていると思う感覚は、「自己肯定感」を育て、「こう考えても大丈夫なんだ」という安心感につながり、他者を信頼する心が育つのではないだろうか。そんな気持ちで、私はB男に関わってきたし、そのことをメッセージに込めた。

### (8) 「班ノートでのやりとり」の実践が教えること

#### ① 価値観の押しつけではなく、仲間の本音が、それぞれの価値観を鍛え育てる

B男は、人を信じられない気持ちと自分に対しても悲観的になる気持ちを、C子は、仲間はずれにされた経験と仲間はずれにした経験を赤裸々に語っている。自分の弱さや汚さ、情けなさを正直に告白しながら、C子は、「けど、私は、仲間はずれにされても、人を信じてました。人を信じれなくなったときには、かなりつらいと思うから」「怖がらないでがんばって!」とB男を励ましている。それを読んだG男は、「すぐ人の意見に流されるし、自己中だし、こんな自分がほんともう恥ずかしくて嫌だ。自分で自分にすごくむかついた」と自分の弱さを見つめながら、「だから、これからは自分の考えをしっかりと持って生きていきたい」と決意している。

経験を積んだ大人は、まず、子どもの未熟さや弱さに目がいてしまい、弱さに共感する前に、「こうすればいい」とアドバイスしたくなる。しかし、それは子どもが自らつかみ取ったものではなく、大人の価値観の押しつけに過ぎないため、何かあればすぐに消えてしまうもろい力である。

弱さも強さも併せ持つ仲間の心情は自分と同じものだから、共感できるし、自他を励まし、よりよい生き方を探りながら自分なりの価値観をつくり上げていくことを、B男やC子たちは示している。

#### ② 生徒たちは互いに関わり合い学んでいく

私がしたことは、3人の文章を授業で使う了承を得てそれを核にした授業をただで、生徒たちの心を動かしたのは、B男ら3人の文章だった。そこにつづられた様々な思いを自分のこととして受けとめ、共感したのは、クラスメートたちである。だからどの生徒も、「勉強になった」「成長した」と思える授業になったし、同じ中3の目線に立った仲間の言葉だから、B男も「自分には大切な授業だった」と素直に受けとめられたのだろう。

親や教師は、子どもを悩ませたくない（苦しめたくない）ために、子どもたちのトラブルに介入・助言してしまい、結局子どもは何も学ばず問題が解決されていることがよくある。長年かかわっている「不登校の親と教師の会」で、職場での人間関係がうまくいかず、仕事を辞めひきこもっている娘の母親が、「小・中・高校生の時は、友達関係がうまくいかないと、すぐに親や先生が介入し、本人が十分悩む間もなく解決してくれた。人間関係がうまくいかないとどうするかを体験しないまま大人になってしまったことが、社会人になって挫折した1つの原因のような気がする」と話してくれたが、子どもたち自身が主体的にいじめや人間関係のトラブルに向き合い取り組む経験は、その点からも重要である。

## 3 道徳授業に求められるもの ～改めて2つの事例と文科省を対比して～

### (1) 「弱さ＝恥ずかしいこと」の価値観の押しつけじゃないから本音を出せる

いじめられた時、子どもが親や教師に言わない理由の一つに、「いじめられるのは、自分が弱いからだ」

というものがある。「弱さ＝恥ずかしいこと＝悪いこと（ダメなこと）」の価値観が広く存在し、子どももそれに染まっているため、いじめられる「弱い」自分を恥ずかしくダメな存在とってしまうのである。「弱さ」を出せない社会は、「できないのは自分が悪いからだ」と自己責任の風潮を強め、人々を苦しめる。

「僕らが守る！」のA子は、いじめられていることを、(教師の手を借りてではあるが)みんなに言った。「班ノートでのやりとり」のC子は、過去にいじめられた自分やいじめた自分を、班ノートに書くという形でオープンにした。それは、「弱さを出しても大丈夫」という安心感があったからであろう。

「弱さ」を受け入れてもらえる安心感があるから、子どもたちは本音を出せるのだし、本音を出せたとき、ありのままの自分を見つめ、葛藤し、よりよい自分を目指す、「建前ではない道徳授業」になるのではないだろうか。

## (2) クラスメートと積極的に関わらせる活動を

不安や悩みは自分一人が抱えているものではなく、誰もがもつものであり、隣にいるクラスメートも自分と同じように不安や悩みを抱えていると分かる経験が、子どもたちは希薄である。前述の「弱さ」を受け入れてもらえる安心感は、他者への信頼によって生まれるが、昨今の子どもたちは、互いの関係が希薄なため、信頼関係を構築できないまま大人になっていく。

2つの事例は、一人の不安や悩み・思いを仲間に伝え、みんなで考える授業や活動が中心になっている。「班ノートでのやりとり」で、B男が、「自分には大切な授業だった」と素直に思えたのは、自分の気持ちをみんなが受け止めてくれたことを実感したからである。また、3人の文を読んだクラスメートたちが、「学べた」「成長できた」と異口同音に書いたが、仲間との意見の交流が、前向きな気持ちを引き出し、よりよい自分を目指すきっかけになることを示している。道徳の授業はもちろん、日常的に子どもたちを積極的に関わらせ、互いの考えや気持ちを交流させる意図的な取り組みが求められる。

## (3) 一人じゃないから頑張れる

「僕らが守る！」で、クラスメート全員がA子を助ける勇気を出せたのは、「一人じゃない。仲間がいる」と思えたからである。「いじめに気付きながら止められない」理由の多くが、「止めると自分がやられるんじゃないか」と思うからであり、それはA子のクラスメートも同じだった。それを乗り越え行動できたのは、文字どおり「みんなでやれば怖くない」で、その背景にある「仲間への信頼」だった。

理不尽なことに会ったとき、泣き寝入りせず立ち上がる力となるのは、仲間の存在である。体験を通して学ぶことで、「見て見ぬふりをしない自分になろう」という心や力をつけていくことを、「僕らが守る！」の事例は教えてくれる。

## (4) 「自己肯定感」と「人間信頼感」を育てる

辛いときや悲しいとき、「辛いね」「悲しいね」と共感してもらえることによって、人はいやされ、次へのステップを踏み出すことができる。いじめられているとき、寄りそい気持ちを分かってくれる友だちの存在は大きい。また、「分かってもらえた」体験は、「辛いときは助けてと頼っていいんだ」と人を信頼する心を育てる。寄りそった体験や助けた体験も同様である。「僕らが守る！」のクラスメートとA子の関係は、まさにそういう関係であった。いじめではないが、「班ノートでのやりとり」でB男の否定的な気持ちを「自分もそうだったよ」と共感的に受け止めるC子も、B男の「自己肯定感」や「人間信頼感」を育てていると言える。

文科省は、「自己肯定感」を、「自尊感情」や「自己有用感」と説明し、「褒められたり、認められたりすることで育つ感情」と述べる。「自分にはいいところがある」＝「自尊感情」で、「誰かの役に立つ」＝「自己有用感」であると説明し、「日本の子どもたちには“自己有用感”を育てることが求められる」と述べる<sup>(註5)</sup>。そして、どちらの感情も、子どもが何かよいことをしたときや頑張ったとき、あるいは誰かの役に立ったときなど、どちらかといえばプラスになるような行為に対して、褒めたり、認められたりすることによって育つ感情だとしている。

しかし、私が使う「自己肯定感」は、むしろマイナスと評価されがちな行為や感情を、「そんなあなたで



いいんだよ」と認めてもらうことによって育つ感情である。「弱い自分が情けない」「勇気を出せなくて嫌になる」など、自分を責めてしまうようなとき、「大丈夫だよ」と言ってもらうことによって育つもので、文科省が示す「弱さは克服すべきもの」の価値観からは、絶対に育たない感情である。

（文科省は、「弱さを強さに変えられるという確かな自信をもてること＝自己肯定」とも述べている<sup>（註6）</sup>）

#### （5）時間をかけ、深くていねいにかかわりながら集団づくりをする

2つの事例を大学の授業で扱った際、「A子もB男も、どちらも周りに恵まれていた」という感想がいくつかあった。「たいていの場合、周りは見て見ぬふりをしてしまう。自分の中学時代はそうだった」と書いた学生もいた。

この事例が、集団ができたばかりの4月や5月の出来事なら、その感想は肯けるが、事例の集団は、どちらもできてから2年近く経った集団である。それまでの様々な活動でできあがった集団の質が、学級で起こる諸問題への取り組みの際に問われる。1年経っても、「見て見ぬふり集団」のままで進歩がなかったり、後退して「いじめが日常の風景になっている集団」になってしまっている場合もあれば、「仲間を助ける集団」「いじめを許さない集団」になっている場合もある。その違いを、その時々の子どもの資質や能力の違いに求めていたのでは、教育の放棄になってしまう。

いじめや人間関係のトラブルは、集団の中で起こる。また、所属する集団との相互作用を通じて、子どもたちは自分とは違う他者との関係をはじめさまざまなことを学んでいく。担任に求められるのは、集団の質の分析であり、育てたい集団のイメージをもつことであり、そこに近づけるための日々のていねいな実践である。

2つの事例とも、子どもたち一人一人の個性や課題を、日々の観察や会話、班ノートや様々な表現手段で把握し、彼らとのコミュニケーションを繰り返し、全体へも広げながら、信頼関係を構築している。「周りに恵まれていた」のではなく、「恵まれた周りをつくり上げていった」のである。

### 4 まとめと補足

#### （1）いじめ防止やいじめへの取り組みは、道徳の授業だけでできることではない

繰り返しになるが、いじめを含む友だち関係のトラブルは、人とのかかわりの中で生じ、展開し、発展（解消）していく問題である。学校生活全般の中で取り組まねばならない課題であり、道徳の授業は、その1つに過ぎない。授業中や部活動、生徒会活動、学校行事の取り組みなど、様々な場面で、いじめやトラブルは起こるし、その機会を逃さず取り組むことであって、道徳の授業を「要」と位置づける必要はない。

道徳の授業を意味あるものにするには、子ども同士の関わりや、子どもと教師の関わりをていねいに積み上げていく実践が不可欠だし、そこで構築される互いの信頼関係があってこそ、一人一人の心に迫る道徳指導ができるのである。また、ていねいな学級経営や集団づくりによって、一人一人が大切にされ、多様な価値観が尊重されていると実感できる集団が土台にあるからこそ、道徳の授業で取り上げるさまざまな価値観も、「きれいごと」ではなくこどもたちの心に残るのである。道徳の授業が意味あるものになるかどうかは、日常的教育活動の営みにかかっているといえる。

#### （2）自由で民主的な学校かどうか

道徳の授業で、どれだけ道徳的価値を学んでも、学校の雰囲気や、子ども同士、子どもと教師の関係が歪んでいては、子どもたちは「面従腹背」を学ぶだけである。例えば、「あいさつの大切さ」を教えながら、実際は下級生が上級生に一方的にあいさつするだけの裏ルールがあったり、「寛容」を教えながら、生徒のちょっとした失敗を激しく叱る教師だったり、「個性の伸長」といいながら、同調を求め、同じじゃなければ排除するような生徒指導だったり、「建前と本音」が一致しない学校や学年・学級・部活動集団のような場合である。一人一人が大切にされ、自由で民主的な学校（集団）でない限り、道徳の授業でどんなに立派なことを教えても、建前と本音を上手に使い分ける人間が育つだけだろう。

#### （3）ていねいな集団づくりには、人、ゆとり、職場の助け合いが欠かせない

子ども同士、子どもと教師のいい関係をつくり信頼を構築するには、一人一人の児童・生徒を見つめ、考え、関わる、心と時間のゆとりが教師になければならない。道徳教育の充実やいじめへの取り組みを強調するなら、教員定数増や少人数学級の実現、担当業務の削減など、日本の教師の劣悪な労働環境改善を早急に行うべきである。

また、重い課題に取り組む教師を育て支えるには、居心地がよく働きやすい職場環境が欠かせない。それは、弱音を吐け、助け合え、応援しあえる、教師が「自己肯定感」と「人間信頼感」をもてる職場である。教師が安心して働ける職場づくりは、管理職の重要な仕事であり、管理職の資質向上も必要だろう。

#### (4) 逃げることを教える

いじめや理不尽なことに直面したとき、それと向き合い解決（克服）するために行動することも大事だが、いじめで自殺する子どもたちがあとを絶たない現実や、若者をめぐる昨今の過酷な労働環境を考えると、「自分を守る」ために「逃げること」を肯定的にとらえ、道徳でも取り扱うべきではないだろうか。「責任」や「向上心」「社会参画」「勤労」といった道徳の内容項目は、それぞれ大事なことであろうが、場合によってはそれが自らを追いつめ苦しめるものになりかねない理不尽な労働環境が存在することを、指導者は知っておくべきだし、そのうえでどのようにそれと向き合うかを考える授業も必要なのかもしれない。「逃げること＝弱さ＝恥ずべきこと」の価値観と決別することが大前提であることは言うまでもない。

#### 註

- (1) 「道徳の特別の教科化の大きなきっかけは、いじめに関する痛ましい事案でした」（「いじめに正面から向き合う「考え、議論する道徳」への転換に向けて」、2016年11月18日、文部科学大臣 松野博一、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/28/11/1379623.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/11/1379623.htm), 2017年10月21日、確認）。
- (2) 「パスカルは、「だが、それは考える葦である。」と続け、思考が人間の偉大さをつくると考えた。（中略）こうした苦しみに打ち勝って、恥とは何か、誇りとは何かを知り、自分に誇りをもつことができたとき、人間として生きる喜びに気付くことができる。（筆者注 小学校編は、「弱さを羞恥として受け止め」と表現している。文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2015年7月、P68）。そして、人間として生きることへの喜びや人間の行為の美しさに気付いたとき、人間は強く、また、気高い存在になりうるのである。「気高く生きようとする心」とは、自分の良心にしたがって人間性に外れずに生きようとする心である。良心とは、自己の行為や性格の善悪を自覚し、善を行うことを命じ、悪を退けることを求める心の動きである。義務の観念と深く関わり、義務を遂行できなかったとき深い後悔の念を抱き、義務を遂行でき他者との絆を守れたとき本来の自己を取り戻せたとして喜びを感じる」（文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2015年7月、P67）。義務という語句も、明らかにゆがめて使用されている。この場合であれば、「約束を果たす」「契約を守る」であろう。
- (3) 「道徳科の授業では、特定の価値観を生徒に押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育の目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものである」（文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2015年7月、P13）。「指導の際には、特定の道徳的価値を絶対的なものとして指導したり、本来実感を伴って理解すべき道徳的価値のよさや大切さを観念的に理解させたりする学習に終始することがないように配慮することが大切である」（同上、P15）。
- (4) いじめを扱う例として、文科省は「役割演技を通して、仲間はずれにする側の気持ち、される側の気持ちを考える授業」をあげている（文部科学省「道徳の質的転換によるいじめの防止に向けて」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/28/11/\\_icsFiles/afieldfile/2016/11/18/1279623\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/11/_icsFiles/afieldfile/2016/11/18/1279623_1_1.pdf), 2017年10月22日、確認。小林沙友里「第2学年 『公正、公平、社会正義』の学習展開」『初等教育資料』No.940、文部科学省教育課程課・幼児教育課、2016年5月、18～19ページ）。また、文科省が言う「指導方法」の「工夫」の「体

験的な学習」(文部科学省『中学校学習指導要領』2017年3月, 142ページ)に応え, ロールプレイのような形で, 子どもたちにいじめられ役やいじめ役を体験させる教科書が検定を通った(「教科書検定 考える道徳 手探り」『読売新聞』2017年3月25日)が, いじめ問題の安易な劇化は, 子どもたちの心を傷つけトラウマとなる危険な側面があることを考慮すべきだろう。

- (5) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「「自尊感情」?それとも,「自己有用感」?」生徒指導リーフ18, 2015年3月, <http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf>, 2017年10月22日, 確認。
- (6) 「生徒が, 自分の弱さを強さに, 醜さを気高さに変えられるという確かな自信をもち自己肯定でき, よりよく生きる喜びを見いだせるような指導が求められる」(文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2015年7月, P68)。